

花山村文化財調査報告書第1集

花 山 寺 跡

昭和54年3月

花山村教育委員会

花 山 寺 跡

序

栗駒山麓に広がる花山村の歴史は古く、神秘的な霊峰栗駒山に象徴されるように伝説秘話も多く、これを物語る史跡や遺物も現存していますが、現代社会の文化的生活のなかで次第に埋れ、また忘れられようとしております。

しかし、花山寺跡や温湯番所などの遺跡に伺い知る如く、かつての時代に多くの祖先が自然の悪条件とたたかいながら苦難を乗り越え、安住の地としていた在り日の面影を見つめることは、わが郷土の生成発展を知る上で貴重なものであります。

幸いにもこの度、花山寺跡の調査が宮城県教育委員会及び関係者の御指導御協力により所期の目的を達成して終了いたしました。ここに、意義ある祖先の遺産の一つを公開できますことに敬意を表し、刊行の序といたします。

昭和 54 年 3 月

花山村教育長

狩 野 政 雄

目 次

序	花山村教育委員会教育長 狩野政雄
例 言	
I 調査に至る経過	1
II 位置と環境	2
III 調査の内容	5
IV 花山寺跡について	宮城県文化財保護審議会委員・東北学院大学教授 伊東信雄
(特別寄稿)	11
1 はじめに	12
2 大御堂の遺跡	13
3 池と中島	16
4 出土遺物	17
5 大御堂と花山寺	20
6 花山寺の歴史的な性格	23

例 言

1. 遺 跡 名：花山寺跡
2. 所 在 地：宮城県栗原郡花山村字本沢御堂
3. 調査主体：花山村教育委員会
4. 調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
5. 調 査 員：丹羽 茂・真山 悟
6. 調査期間：昭和53年10月26日～12月14日
7. 調査面積：約120,000㎡
8. 本書を作成するにあたり、昭和31年度の調査を担当された伊東信雄先生より「花山寺跡について」と題する特別寄稿を執筆していただいた。本書のⅠ～Ⅲの執筆、編集については調査員の協議をもとに真山が担当した。なお第5、6、8図および写真図版1～7、花山寺鰐口の写真は伊東先生より提供されたものである。

I 調査に至る経過

花山寺跡は、宮城県栗原郡花山村字本沢御堂にあり、一迫川の水をダムでせきとめて造った花山湖の西北岸に位置している。

この遺跡が注目されるようになった大きなきっかけは、昭和31年晩秋に実施された発掘調査によって、平安時代末期の貴重な寺院遺構であることが明らかにされてからである。

この調査は、花山村教育委員会が主体で、調査担当は当時の東北大学教授伊東信雄氏であった。伊東教授は、大御堂跡および池の一部について調査されたのであったが、その詳細な内容は本書におさめた伊東教授の『花山寺跡について』を参照願いたい。

今日、平安時代末期、平泉時代の寺院の遺跡として東北地方で知られているものは、岩手県平泉の中尊寺、毛越寺、観自在王院、無量光院、宮城県角田市の高蔵寺阿弥陀堂、福島県のいわき市白水の願成寺阿弥陀堂などが著名であり、その他では岩手県江刺市の益沢院、一関市の骨寺などが文献で知られる。この中には、大規模な発掘調査の実施によって、往時の復元化がはかられている平泉の寺院や白水の阿弥陀堂等があるが、花山寺跡の調査もこのような研究の一環をなし、学術的な照明を大きく与えたものであった。

ただし、昭和31年度の発掘調査は、調査費用や日数の関係もあって規模が小さく、花山寺跡の全体の範囲や遺構を把握するには至っていない。本格的な調査は今日および将来に持ち越されているのである。

こうしたときに、花山村当局は、郷土の歴史的遺産に多大の関心を表明し、村の歴史を解明する一つの契機として花山寺跡についての具体的な措置と今後の指導とを宮城県教育委員会に依頼してきた。そこで両方で協議した結果、花山村教育委員会が、昭和53年度の文化庁国庫補助金の交付を得て、まず、遺跡の基本的な資料のひとつとして、遺跡全体の地形測量図を作成することになったのである。

Ⅱ 位置と環境

花山寺跡は栗原郡花山村本沢字御堂に所在する。村役場より西北に約 700m の地点である。

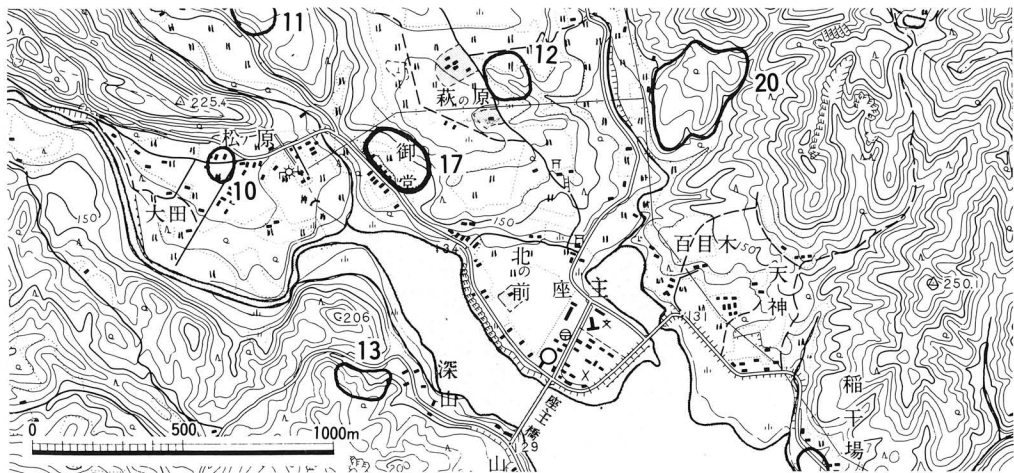
花山村は宮城県の西北部に位置し、奥羽山地に入り込んだ谷あいにはひらけた村である。村の総面積の96%が山林で、3.7%が耕地という数字が示す如く（花山村史：1978）花山村はその大半が山地によって占められた地勢となっている。村の西北端にそびえる標高 1,627m の栗駒山を主に、1,405m の虚空蔵山、1,155m の大地森など 1,000m を越すもののほか、790m の大倉山、519m の御駒山といった 500m 以上の山が群在し、周囲の山陵を形づくっている。

栗駒山から源を発する一迫川や、一桧山に源を発する草木川などの河川は、これらの山地を開析し狭小な沢谷を形成させている。本沢、草木沢などがそれで標高 150～200m の低地となっており、村の中心地をはじめいくつかの集落が立地する。本沢の低地の縁辺部には一迫川によって形成された小規模の河岸段丘が認められる。

本遺跡は本沢のなかにあって、一迫川左岸の河岸段丘上に立地している。付近の標高は 140m 前後でほぼ平坦な地形となっているが、河川敷との境は約10m の落差をもつ段丘崖となっている。背後には標高 180m 前後の小丘陵がせまっており、平坦地との間には40m ほどの比高をなす。現状は水田、畑地、宅地などとなっており、中央部を県道志津川一湯沢線が走っている。



遺跡遠景（矢印は大御堂跡）



第1図 花山村の遺跡分布 (No17：花山寺跡) (承認番号)昭54東復、第248号

遺跡番号	地図	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	出土品
50001	1/2.5万 花山湖	坂下A遺跡	草木沢、坂下12	丘陵斜面	包含地	縄文(前・中・弥生)	縄文土器、弥生土器、石器(石斧・石匙)
50002	〃	大笹A遺跡	〃、西風17	〃	〃	縄文(晩)	縄文土器(小壺)、石斧、石匙、石鏃、土偶
50003	〃	程野遺跡	〃、程ノ前	谷底平野	〃	縄文(中・晩) 弥生(中)	縄文土器、石斧、石匙、石鏃、弥生土器(大泉)、土偶
50004	〃	原井田遺跡	7の2、合道山6の1	丘陵斜面	〃	縄文(前・中・後)	縄文土器(大木6.7.8)、石斧、石鏃、石籠、石鏃、石棺、石刀、磨石
50005	〃	大穴山遺跡	〃、大穴山	丘陵頂	〃	縄文(早・前・後)、弥生(中・後)	縄文土器、石斧、石棺、石棒、石鏃、弥生土器
50006	切留	穴の原遺跡	本沢、山内、穴の原	丘陵中腹	〃	縄文(前・中)	縄文土器、石器、石棒
50007	花山湖	大和田遺跡	〃、〃、山伏山	〃	〃	〃	縄文土器(中)
50008	〃	越戸遺跡	〃、〃、早坂1の3	丘陵麓	〃	縄文(後・晩)	縄文土器、土偶
50009	〃	早坂遺跡	〃、早坂37の2	谷底平野	〃	縄文(前・後・弥生(後))	〃、石匙、弥生土器(天王山)
50010	〃	松の原遺跡	〃、松田、松の原28	台地	〃	縄文(前・中・晩)	縄文土器(大木6.7.8.9、大洞B)、注口土器、石斧、石鏃、石籠、土偶
50011	〃	沼山遺跡	〃、沼山19の3、30	丘陵斜面	〃	縄文(後・晩) 弥生(中)	縄文土器、石斧、弥生土器(大泉)
50012	〃	萩の原遺跡	〃、萩の原270	〃	〃	縄文(晩) 弥生(中)	〃、〃、石匙、石鏃、弥生土器(大泉)
50013	〃	天王坂遺跡	〃、深山	〃	〃	縄文(中・後・晩)	〃、石匙
50014	〃	天沢遺跡	〃、天沢	〃	〃	縄文(中・晩) 弥生(中・後) 平安	〃、石皿、石鏃、磨石、鹿角、弥生土器(大泉・天王山)、土師器
50015	〃	長窪遺跡	〃、北山開拓	〃	〃	縄文(前・中)	〃、凹石、敲石、石皿、住居跡
50016	〃	荒井田遺跡	〃、荒井田	丘陵斜面	〃	縄文(中・後・晩)	縄文土器(大木8)、石鏃
50017	〃	花山寺跡	〃、御堂25	台地	寺院跡	平安	丸木舟、古銭、木製品、石製品
50018	〃	箕の口遺跡 (巳の口館、古館)	草木沢、箕の口	丘陵	城館	室町	
50019	〃	花山城跡 (淵中館、淵及館)	本沢、淵中	〃	〃	奈良	
50020	〃	百目木館跡	〃、百目木	〃	〃	室町	
50021	〃	金沢遺跡	〃、金沢	丘陵斜面	包含地	縄文(前)	縄文土器(大木3)
50022	〃	北山遺跡	草木沢、北山	〃	〃	縄文(中)	縄文土器
50023	〃	日向山遺跡	〃、日向山	〃	〃		
50024	〃	角間遺跡	〃、角間	〃	〃		
50025	〃	西風山遺跡	〃、西風山	〃	〃		
50026	〃	坂下B遺跡	〃、坂下	〃	〃		
50027	〃	大笹B遺跡	〃、大笹	〃	〃	縄文(前・中)	縄文土器(前・大木8b・9)
50028	〃	大笹向遺跡	〃、大笹向	〃	〃		
50029	〃	荒谷遺跡	〃、荒谷	〃	〃	縄文(前)	縄文土器
50030	〃	合道遺跡	〃、合道	〃	〃		
50031	〃	大滝遺跡	〃、大滝	〃	〃	縄文	石器
50032	〃	小田裏A遺跡	〃、小田裏	〃	〃	旧石器・縄文(前・中・晩)	有舌尖頭器・縄文土器
50033	〃	小田裏B遺跡	〃、〃	〃	〃	縄文	石器
50034	〃	小田原A遺跡	〃、小田原	〃	〃	〃	フレーク他
50035	〃	小田原B遺跡	〃、〃	〃	〃	縄文(前・中) 奈良・平安	縄文土器、土師器
50036	〃	赤坂遺跡	〃、赤坂	〃	〃		
50037	〃	堀切遺跡	本沢、沼山	〃	〃	縄文(早)	縄文土器
50038	切留	国史跡 寒湯番所跡	本沢、温湯11他	丘陵麓	番所跡	近世	
50039	花山湖 岩ヶ崎	鹿込山横穴 古墳群	本沢、淵中、鹿込山	丘陵斜面	包含地 横穴古墳	縄文・弥生・古墳後	縄文土器、弥生土器、4基
50040	花山湖	入角坊遺跡	本沢、矢沢、入角坊	〃	包含地	縄文・弥生・古化	縄文土器、弥生土器、土師器
50041	〃	一桧山立岩沢 遺		〃	〃	縄文(早・中)	縄文土器、石鏃、石斧

第1表 花山村遺跡地名表

また背後の丘陵は大半が杉林となっており、丘陵上からは眼下に花山湖を見渡すことができる。

花山村には多くの遺跡が存在する。現在38ヶ所ほど知られており、旧石器時代から近世に至るまで各時代にわたっている。このなかでは縄文時代のものが比較的多く26ヶ所を数える。以下、各時代の主な遺跡を紹介してみたい。

旧石器時代の遺跡には有舌尖頭器を出土した小田裏A遺跡がある。縄文時代のものは、旧石器時代から続く小田裏A遺跡のほか、越戸遺跡、坂下A遺跡、大穴山遺跡などがある。弥生時代には早坂遺跡、萩の原遺跡、天沢遺跡などがあり、これらはいずれも縄文時代から連続するものである。古墳時代に属するものとしては鹿込山横穴古墳群が存在する。

本遺跡は平安時代末期から鎌倉時代にかけての寺院跡として知られるが、他に同時期の遺跡は現在のところ確認されていない。しかし、これに先行する時代のものとして奈良・平安時代の小田原B遺跡、天沢遺跡の2ヶ所がある。縄文時代に比べるとその数はきわめて少ないが、花山ダムによってかつての村の耕地が湖底に沈んだことを考えると、この時期の遺跡のいくつかも、同時に没してしまった可能性がある。

後続する中世では大崎氏の家臣であった狩野兵庫允為猶の居館であると伝えられる巳の口館や、館主不明の百目木館などの城館跡がある。狩野兵庫允為猶は花山寺の伝世遺物とされる鰐口にその名をとどめており、当時の有力な豪族であるとともに花山寺と密接な関係のあった人物と考えられる。この事がらの詳細については本書収録の『花山寺跡について』で述べられている。

また近世において仙台藩の検問所であった寒湯番所（花山口御番所）跡があり、この地がかつては交通の要所であったことを物語っている。

Ⅲ 調査の内容

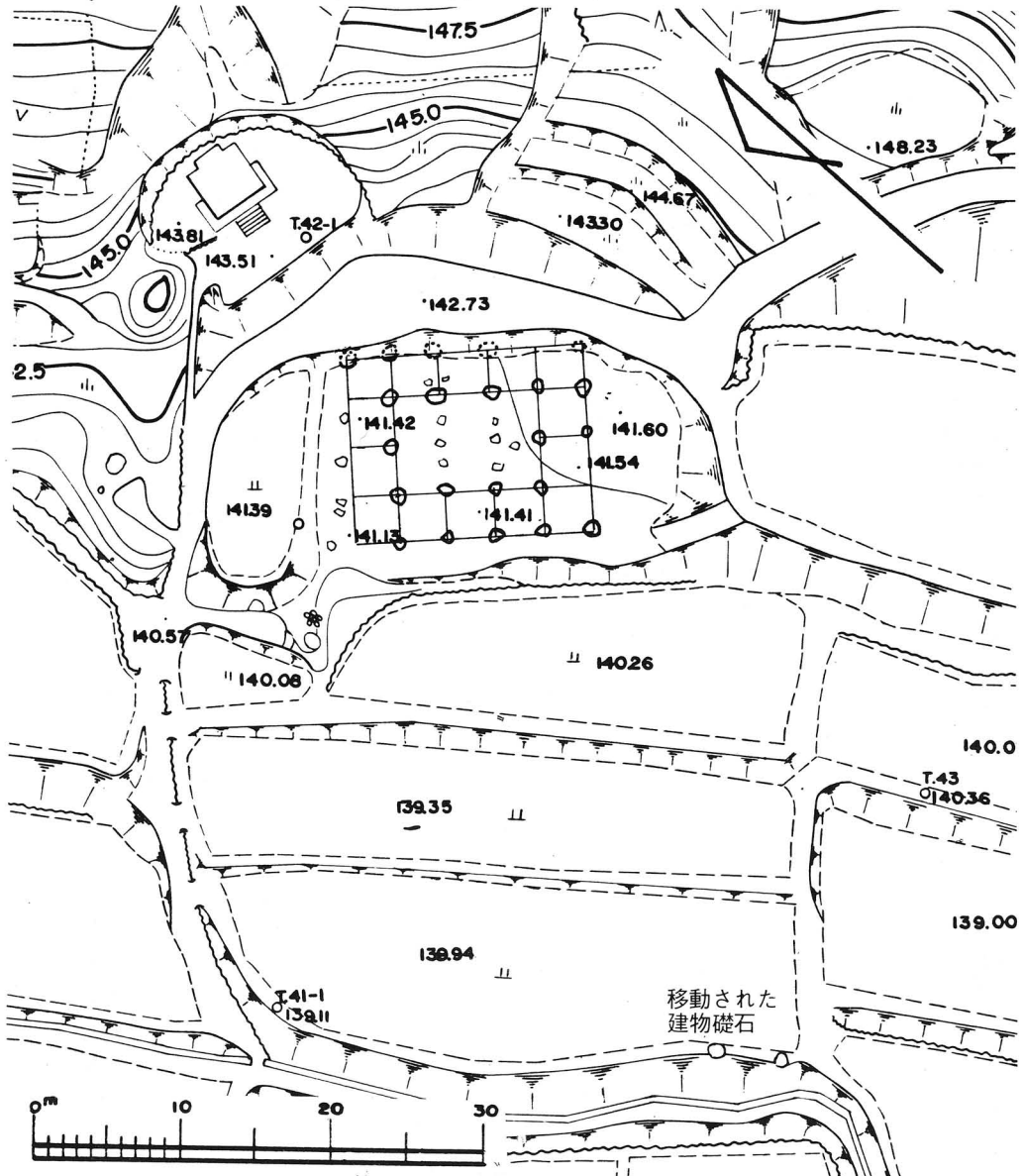
花山寺跡は昭和31年、当時東北大学教授であった伊東信雄氏らによって発掘調査が行なわれたが、その際花山寺大御堂跡の礎石や浄土庭園の池跡、中島跡などが発見されており、これらの調査結果から、花山寺跡は平安時代末期に栄えた平泉、藤原氏の時代に建立された寺院遺跡であることが判明している（伊東信雄：1974）。

今回の調査は、これらの遺構の存する地域を中心とした地形測量調査である。昭和53年10月26日から12月14日にかけて行ない、その面積は約120,000㎡に及ぶ。その間、現地に保管してある池跡から出土した丸木舟の実測も併せて行なっている。ここでは、以上の結果をもとに、遺跡の現状を概観し、また丸木舟についても若干の説明を加えてみたい。

遺跡の現状

花山寺跡は、丘陵と一迫川との間に形成された河岸段丘上に立地している。それは面積にして40,000㎡ほどの平坦地となっている。

大御堂跡を中心として現状をみると、まず大御堂跡は長辺30m、短辺17mの正面が南西を向く長方形の平地となって周囲と画されている。正面は水田となっているが、水田面よりは1mほど高くその境は段状になっている。背後には平地を幾分とり囲むような形でゆるやかな丘陵がひかえている。開田が行なわれたり、細い山道などによって旧地形が変えられている部分はあるものの大部分は杉林や雑木林として残されている。



第2図 大御堂付近測量図

平場には大御堂の礎石となった大石が20個地表面に露出している。現状でも、その配置から3間2間の身舎に4面の庇をもった5間4間の建物跡であることが確認できる。

大御堂跡から一迫川にかけては平坦地が広がっており、この中央を横切るように県道志津川一湯沢線が走っている。大御堂跡から県道までの間は水田化されているが、先年の発掘調査では水田の下から池跡、中島跡、または水田の畦畔で建物の礎石が発見されている（第5図）。池跡は発掘の結果では規模が長軸75m短軸45mの楕円形をもつと推定されており、現状では池の北東岸は大御堂前面40m付近の水田の畦畔、南西岸は県道まで達すると考えられる。南東岸および北西岸は水田がほぼ同一のレベルで続いており、地表観察では明確ではない。建物の礎石は、鐘楼跡か経堂跡と推定されたものであるが現在は原位置をとどめておらず10mほど南の畦畔に移されてしまっている。

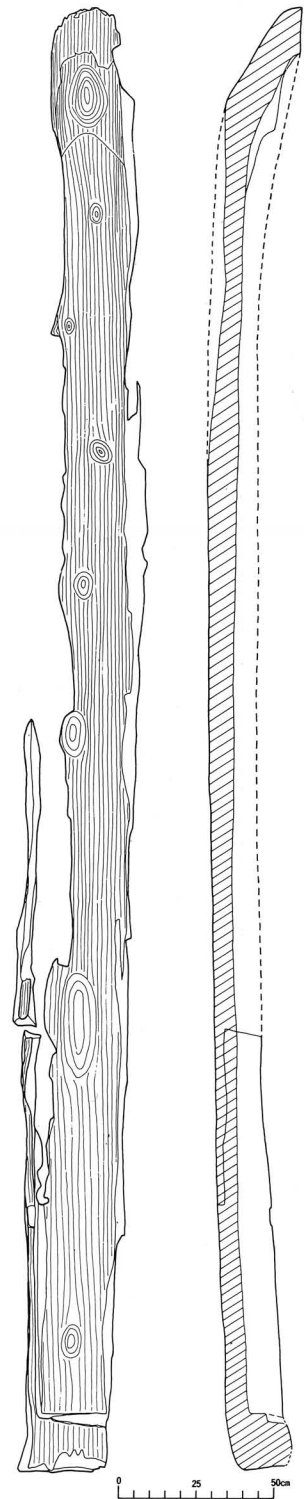
県道を隔てて大御堂と向いあった地域に大門という地名が残っている。『花山寺跡について』で後述される如く、寺院の南大門の名残りと考えられる地名であるが、付近一帯は宅地や畑地となっている。

平坦地は、大門の南西すなわち外側において一迫川と急斜面をもって接するが、この斜面の中ほど、雑木が繁茂しているなかに幅約1.2m、長さ約200mにわたって旧道が確認されている（第4図）。斜面を幾分削り出したものと思われ、川の流路に沿って延びており、県道に対しては迂廻する形になっている。この旧道は大門の位置とのかかわりを考える上で興味深い。

以上が花山寺跡の現状であるが、花山寺の寺域については現在のところ明らかなでない。しかし、大御堂跡や池跡の位置およびこれらが立地する平坦地が川と丘陵とによって画されているといった全体の地形状況などから寺域は少なくともこの平坦地内に含まれるものと考えられる。

丸木舟

先年の発掘で池の部分にあたる水田のなかから出土したとされているもので（第3図）、全長4.8mの一本の木からなる丸木



第3図 丸木舟

舟である。遺存状況は悪く、舟底の外側の前半部は欠損しており舟縁も左側の後半部を残すのみで他は失われている。したがって舟の幅については明らかではないが残存部分から推定して40cm前後になるものと思われる。舟の高さは残存する舟縁の部分で18cmの計測値を得た。また舟の材の材質については次のとおりである。

樹種鑑定報告書

御依頼の出土木製遺物の樹種鑑定を実施しましたが、樹種鑑定の際に樹種の識別に用います重要な識別点の崩壊が著しく、正確な鑑定が実施出来ませんでした。しかし、次のような理由から針葉樹（但し、マツ属、トガサワラ属、カラマツ属、トウヒ属を除く）と思われます。

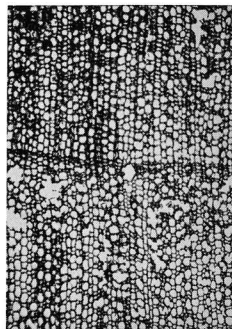
識別理由

1. 垂直、水平樹脂道ともに存在しない。
(この理由から、マツ属、トガサワラ属、カラマツ属、トウヒ属は除外される。)
2. 樹脂細胞の存在は明確ではない。
3. 春材から夏材への移行はゆるやかである。
4. 仮道管にラセン肥厚は認められないが、崩壊の著しい出土木材では消失している場合が多いため、ラセン肥厚の存在した可能性も考えられる。
5. 分野壁孔の崩壊が著しく、確認が不可能である。
6. 放射組織は単列である。

(財)元興寺文化財研究所

松田隆嗣

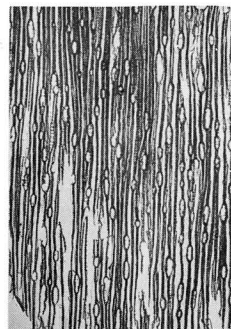
遺物名	樹種
花山村出土木製遺物	針葉樹



針葉樹 C-30X



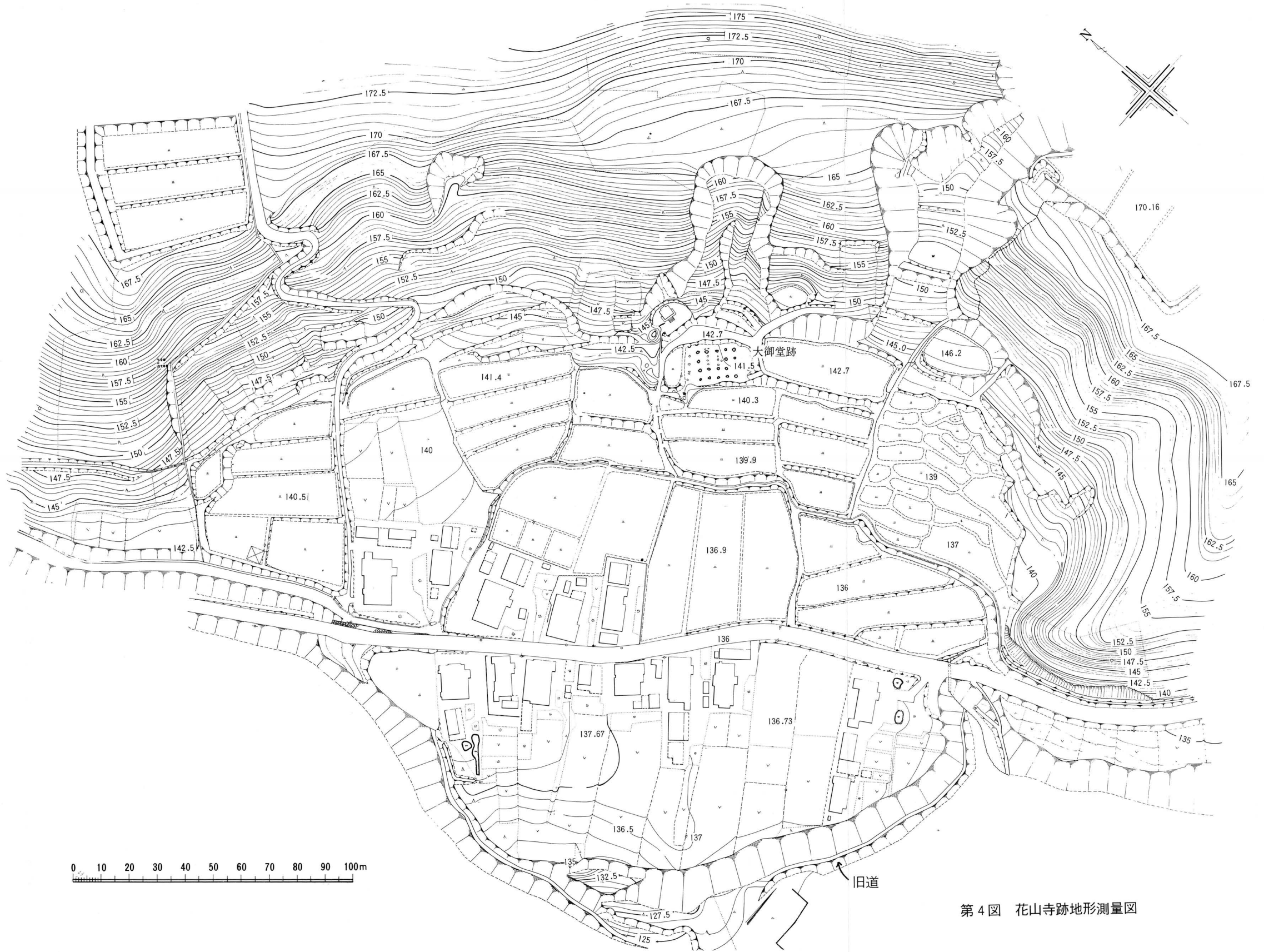
R-150X



T-30X

参考文献

- 花山村 1978 「花山村史」
伊東信雄 1974 「花山寺考」東北学院大学論文集歴史学・地理学4



第4図 花山寺跡地形測量図

特 別 寄 稿

V 花山寺跡について

伊 東 信 雄

1 はじめに

宮城県栗原郡花山村に御堂というところがある。国鉄東北本線新田駅から西方約25kmの地点で、一迫川の上流、一迫川の水が花山ダムによってせき止められてできた人工湖、花山湖の西北岸にある。

御堂という地名は、むかしここに大御堂と呼ばれる仏堂があったことに由来する。安永の頃までは地名も大御堂と呼ばれていた。すなわち『安永風土記書出』の栗原郡一迫花山村の旧蹟の條には

大御堂

一大御堂跡 往古七間四面ノ御堂アリ。不動尊運慶作ナラビニ丈六ノ阿弥陀如来相立ツ。堂ハ飛彈工匠相立テ申シ候。御堂ハ朽捨テ、唯今ハ不動尊バカリ相残り、当時花山寺境内ニ相立居リ申シ候処、年代相知レ申サズ候。關伽井沢並ビニ音無瀧、蓮池アリ、右池ノ中島ニ先年ハ鐘樓御座候由申シ伝エ候。右池ハ当時御田地ニ罷リ成リ、鳴形バカリ相残り申シ候。大御堂退転以來、鐘ハ御城下八幡堂龍宝寺エ懸リ居リ申シ候由。大御堂ノ大門相立候処ハ当時大門屋敷ト唱エ置キ申シ候。別当ハ真言宗金峯山花山寺ニ御座候処、慶長年中当村森ト申候所エ引移、右跡御田地ナラビニ山共ニ花山寺分ニ罷成リ居リ候事。

とあって、花山村の大御堂という処に、大御堂跡と呼ばれる旧蹟があつて、そこにはむかし7間4面の仏堂があり、運慶の作といわれる不動尊と丈六の阿弥陀如来が祀られていた。お堂は飛彈工匠ひだのたくみの建てたものである。お堂は朽ち果て、現在では不動尊像だけが現在の花山寺の境内に遺っているが、その製作年代はわからない。大御堂跡には關伽井沢、音なしの滝、蓮池があり、蓮池には中嶋があつて、先年までは鐘樓があつたと言ひ伝えている。蓮池は現在水田になつており、中嶋の形だけが水田の中に残っている。大御堂廢絶後、釣鐘は仙台市八幡町の龍宝寺に移され、そこに懸っているとのことである。大御堂の大門のあつたところは現在大門屋敷と呼ばれている。大御堂の別当は真言宗の金峯山花山寺であるが、慶長年間に村内の森という処に移転し、その跡の田地ならびに山は花山寺領になっているということが書きしるされている。

これはきわめて重要な記事である。宮城県の中でも山奥の村とされている栗原郡花山村に、大御堂という平安朝的なゆかしい地名があり、しかもそこにはかつて阿弥陀堂があり、しかも前に蓮池があつて、池の中には中島があつたという、藤原時代に流行した浄土庭園のある臨池伽藍の存在を思わせるからである。したがって当然早くから注意されてしかるべき遺蹟であつたが、このことについてある『安永風土記書出』は写本が少なく、ことに花山村の分は宮城県図書館の『安永風土記書出』にも欠けていたので、長い間、人びとの注意から逸していた。

花山村の『安永風土記書出』がたやすく見られるようになったのは、昭和29年発行の『宮城県史』25、資料篇3にそれが収録出版された結果であって、それ以前には大御堂の遺跡は全く世に埋れた存在であったことは、大正7年発行の『栗原郡誌』ではこの寺に何等触れていないことによって察せられるのである。

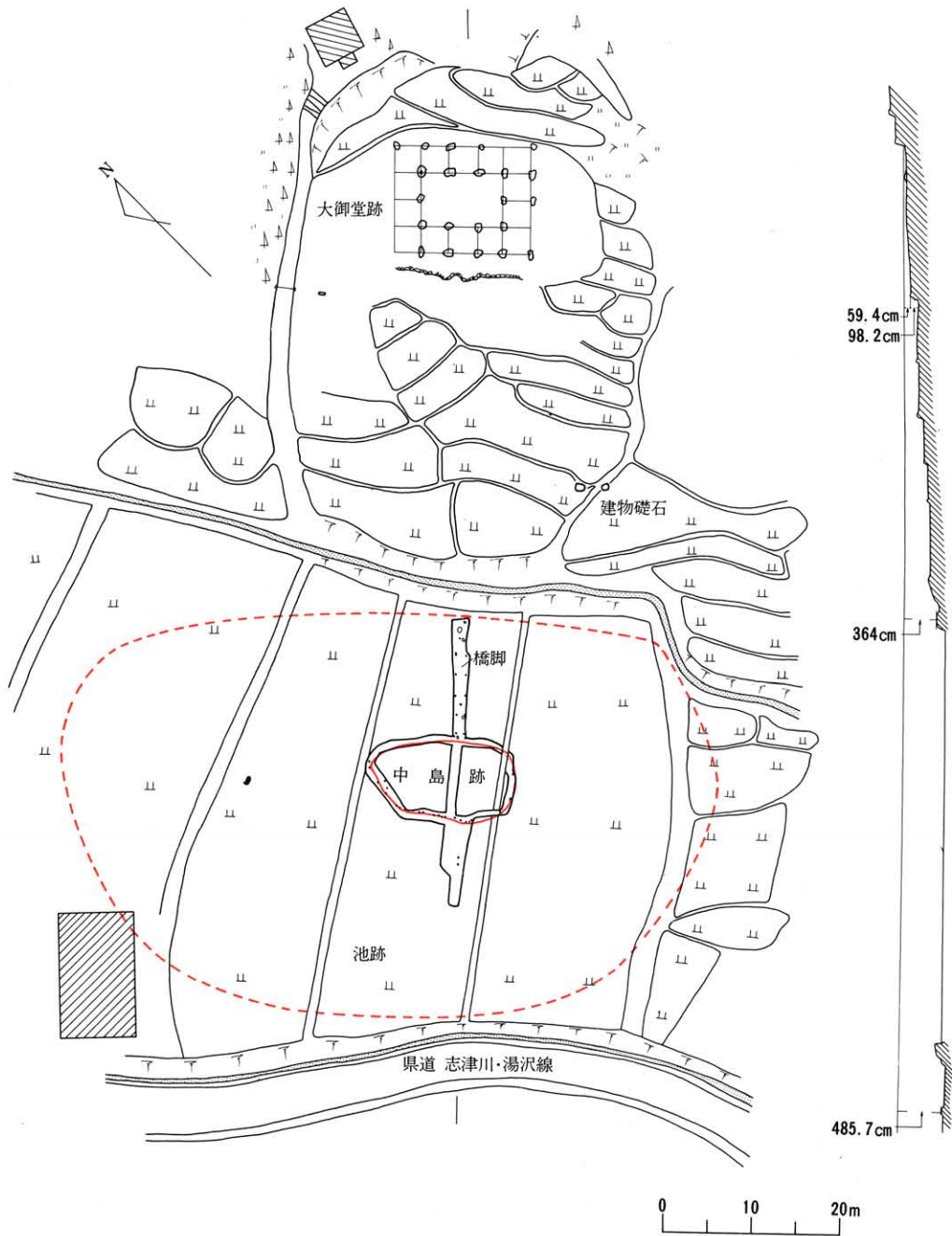
もっとも早くこの記事に注意したのは御堂在住の千葉武雄氏であって、熱心に探索した結果、昭和30年秋、御堂25番地にある菅原金男氏所有の水田に25個の礎石が埋没しているのを確かめ、その調査方を宮城県教育委員会に申請した。

わたしは宮城県教育委員会からの依頼で、昭和31年6月7・8日の両日、建築担当の小倉強県文化財専門員と共に同地に出張、現地を視察した結果、北に山を負い、南に池をひかえた臨池伽藍の遺跡と判定したが、遺跡確認のため発掘調査の必要あることを感じ、その旨村当局に進言した。その結果同年秋花山村主催で発掘調査を行うことになり、31年11月8日から19日までと24・25日の14日間、宮城県第二女子高校の氏家典和、東北大学工学部建築学科の坂田泉、横塚郷、鈴木治平、五十嵐参男、同文学部考古学科の伊藤玄三、佐々木茂楨、林謙作の諸君と共に地元花山村の千葉武雄氏、教育委員会、花山村小中学校教職員諸氏の協力を得て、この遺跡の発掘調査を行った。その結果については『日本考古学年報』9(昭和31年)、『宮城県史』1(昭和36年)、『東北学院大学論集』歴史学・地理学第4号(昭和49年)に簡単に記して置いたが、なお精査の必要を感じていたので、正式の報告はまだ書いていない。

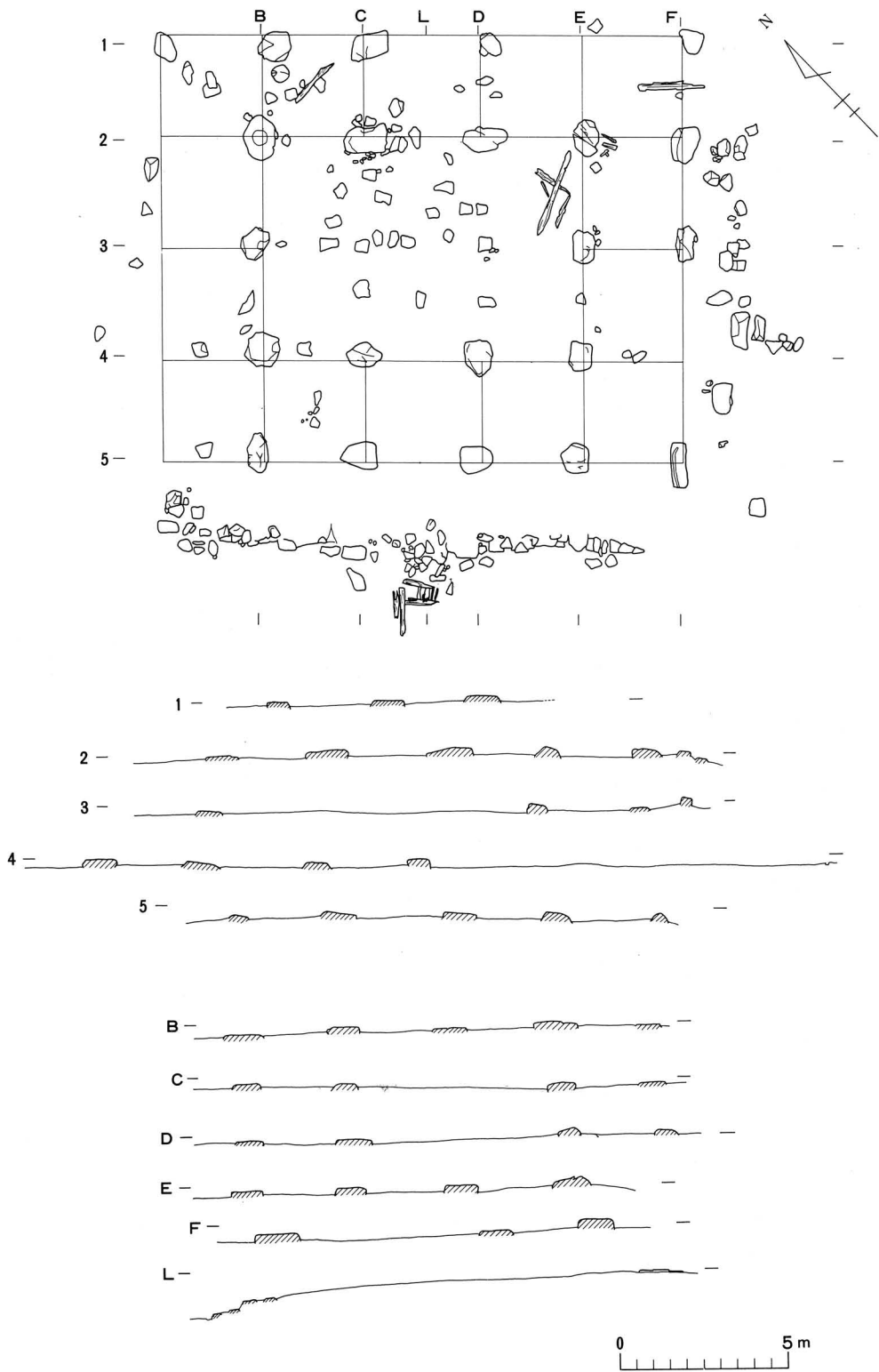
今回花山村教育委員会が文化庁ならびに宮城県教育委員会の援助によって重要遺跡として確認のための緊急調査を行うに当って、当時の調査の結果を記して関係者の参考に供したい。掲載した遺跡の実測図は調査に参加した建築学科の諸君の作製したものであり、発掘関係の写真は筆者の撮影したものである。

2 大御堂の遺跡

大御堂の遺跡は宮城県栗原郡花山村字本沢御堂にある。花山湖の北側を通過して温湯温泉に至る県道湯沢志津川線に沿うたところで、県道の北に接する水田が大御堂の前にあった池の跡であり、大御堂の跡はその東北、県道から100mの傾斜地の中段にあり、その地番は御堂25番地である(第5図)。発掘の結果、ここから径0.8~1m大の河原石の礎石が22個発見され、それによって大御堂と呼ばれた建物が、『安永風土記書出』に記されているような7間4面の建物ではなく、5間4面の西南面する建物であったことが判明した(第6図)(以下便宜上西南を南とする)。桁行15.60m(51.5尺)、梁行12.73m(42尺)で、柱間は桁行は3.03m(10尺)+3.03m(10尺)+3.48m(11.5尺)3.03m(10尺)+3.03m(10尺)梁行は3.03m(10尺)+3.33m(11尺)+3.33m(11尺)+3.03m(10尺)である。礎石は安山岩の河原石の表面の平らなも



第5図 大御堂・池・中島跡



第6図 大御堂礎石

のをそのまま使用したものであるが、内陣の西北隅の礎石にだけ径48.5cm（1尺6寸）の円形の柱座造出しようのものがかすかに見られた（図版2-C）。しかしこれは人工的な造出しではなく、多賀城廃寺などでも見られたように何等かの都合で柱がのったままで、風もしくは流水による侵蝕をうけた結果、生じたものではないかと思われた。そう見ると大御堂の内陣の柱は径48.5cmの円柱であったことになる。内陣にはこのほかにも礎石より小さい石がかなりあったが、これは須弥壇関係のものであろう。瓦は出土しないので、茅葺、板葺、もしくは檜皮葺であったと思われる。屋根は寄棟造りか、入母屋造りであったろう。

大御堂の前通りの礎石列から前2mのところ大きな河原石積の段があって、一段下る。石積の高さは80cmほどである（図版3-a）。その中央の下には木橋の跡が残っている（図版3-d）。一段低くなった前面の左手、大御堂の中心から南南東36mの処にやはり礎石と思われる河原石が2個3mの間隔を置いて東西にならんでいる（図版4-a）。この石は水準の原点に利用した大御堂の内陣西北隅の円形突起ある礎石の表面よりも2.25mほど低い。以前は4個2列に並んでいた由であるが、耕作の邪魔になるので、2個はハツパをかけて取除いたという。おそらく鐘楼か経蔵の跡ではないかと思われる。

伽藍中心線の西側、これと対称の位置に同じような遺構がないかと調べて見たが、見出せなかった。また大御堂と鐘楼あるいは経蔵を結ぶ翼廊の如きものの存在した痕跡はこの発掘では認められなかった。

3 池跡と中島

大御堂跡の前方40mのところにはじまり県道までに達する低い水田はむかしの池の跡である。この水田の現在の表面は大御堂の礎石のある面よりも4.5m低く、また鐘楼もしくは経蔵の礎石と思われるもののある面より2mほど低い。水田にするため地形が変わっているため正確な形は、池全体を掘り出して見なければわからぬが、だいたい東西75m、南北45mの楕円形をなしていたものと思われる。

『安永風土記書出』には池は現在水田になっているが、中島が形だけ遺っている旨記されている。この中島の跡は明治以後まで舟形にのこっておったというが、明治の耕地整理の際、削られて現在は地表には見るできない。しかし水田にトレンチを入れて見ると、普通のところは80cmぐらいで池の底の青粘土に達するのに、ある部分では水田の地表面下20～30cmぐらいで叩きかためた青粘土に達するところがある。これは中島の根が島状に水田面下に遺ったものである。その大きさは東西16m・南北9mを計った。『安永風土記書出』には前に見たように中島に鐘楼があったとの伝説を伝えているが、今回設けたトレンチの範囲内には建物のあった形跡は見出せなかった。

耕地整理以前にはこの水田の中央部に神様田と言って神聖視し、肥料を入れない処があったことを土地では伝えている。大御堂跡の中央から伽藍中軸線を南にねらって、この水田に幅1.2mのトレンチを入れたところ、中島の北側においてトレンチの両側に90cm（3尺）の距離をおいて相対した5対10本の杭があらわれた（図版4-c）。南北の距離は2.3m（7尺）である。直径12～15cmの栗材である。中島の南では幅3m、長さ10mのトレンチを入れて橋脚を探したが、このような杭は見出せなかった。これが南正面の大門から中島を経て大御堂に通ずる参道としてかけられた橋の橋脚であることはまちがいない。

南大門は池の南、現在県道の通っているあたりに大門という地名がのこっており、昭和11年の県道改修工事の際に、水田面から約60cm下から大きな石が4個、1～8mぐらいの材木が発見された由であるからその附近にあったにちがいない。その石は現在道路わきの水路の側石として使われている（図版6-a）。

このように見てくると一迫川を前にして前方がひらけ、後に低い山を負うた景勝の地を相して、5間4間の阿弥陀堂（大御堂）を建て、堂の前には広い池を掘り、中島を設け、池の手前に南大門をつくり、池には2本の橋をかけて南大門から阿弥陀堂に至る参道としたもので、この阿弥陀堂に翼廊があったかどうかはもっと大規模な発掘をして見ないとわからぬが、大体の配置から言って基衡の建てた毛越寺、基衡の妻の建てた観自在王院、基衡の娘徳尼の建てた願成寺阿弥陀堂（白水阿弥陀堂）などと共通するもので、藤原時代に浄土思想の普及にともなって流行した浄土庭園をもつ臨池伽藍の一例と見ることができる。

春先、田植前に水田に水を張った時、大門跡に立って大御堂跡の方を見上げるとよい。水田には水がはいって池が復元される。その水面に裏山の山影がうった姿はまことに美しい（図版1-a）。ちょうど毛越寺の南大門跡に立って、大泉池にうつる塔山の姿を見ると同じである。寺地が同じ思想から選ばれているのをまざまざと感ずることができる。

4 出土遺物

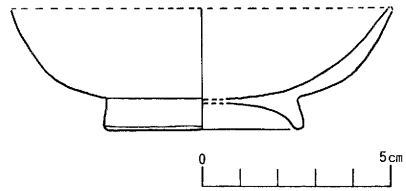
それでは大御堂は藤原時代のものということを出土遺物の上からも言うことができるであろうか。

この発掘によって大御堂跡から出土したものは

石鉢破片	1個	金銅製飾金具破片	1個
方形石盤	1個	漆膜破片	数片
黒漆椀	1個	素焼土器破片	数片
角材	4本		

古 銭

開元通宝	1 枚		
祥符通宝	2 枚		
天聖元宝	1 枚		
皇宋通宝	1 枚		
元豊通宝	1 枚		
元祐通宝	2 枚		
聖和通宝	2 枚		
洪武通宝	1 枚		
永楽通宝	9 枚	寛永通宝	5 枚



第 7 図 黒漆椀

などである。

石鉢破片は内陣から出土したもので(第8図)、高さ12cm、復原径27.2cmで三脚もしくは四脚のついた石鉢の半分に割れたもので、上面に径22cm、深さ4cmのくぼみがある。同様なものが福井県一乗谷の朝倉氏遺跡から出ているから戦国時代頃のものと思われる。

方形石盤と名付けたものは方17.5cm、厚さ4.5cmの白色砂岩の上面に隅から隅へ対角線を細い沈線で引き、中央に径7cm、深さ2.1cmの円孔をうがったもので類品は他で見たことはなく、用途、年代共に不明である。円形造出し様の柱当りのある内陣西北隅の礎石の西、約5mの建物跡のそとから発見された(第9図、図版3-c)。

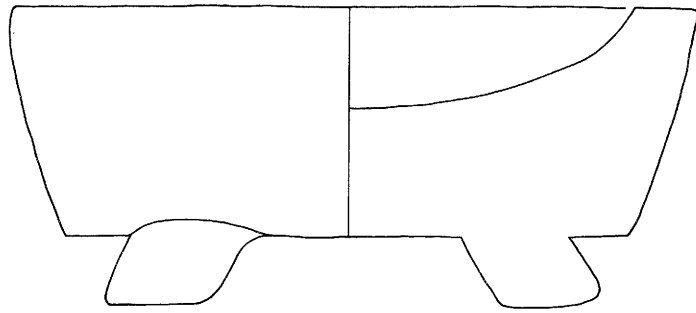
黒漆椀は、勾台のついた黒漆塗無文の木椀で現高3.3cm、径10cmである。内陣よりの出土であるが、特徴がなく時代の判定はつき兼ねる(第7図、図版6-c)。金銅製飾金具や漆膜は仏壇あるいは仏具の破片と思われるが、小さな破片であるために用途時代を判定することが出来ない。素焼土器片も同様である。角材は建築用材である。

古銭は内陣跡から多く出土したが、内陣跡に限らず大御堂跡の各所に散らばって発見された。唐代の開元通宝から寛永通宝まであってその年代幅がひろく、数の上では永楽通宝、寛永通宝が多い。このことは寛永通宝の使用された時代まで大御堂の建物が存続していたことを示している。

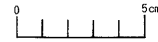
これらの出土遺物からは大御堂を藤原時代まで溯らせることは出来ない。はっきりと藤原時代を示すものがないのみならず後世のものが多いのである。池の底からも中島の南に掘った幅3m長さ10mのトレンチで地下1mのあたりから木鉢1個、木椀4個、用途不明の木器が出土したが、年代は全く不明であった。

鉢は平面楕円形をなし、木椀は円形とともに白木である。木椀などは径13.5~15cmぐらいで完成品というよりは未完成の挽物のように見受けられた(図版7-a・b)。

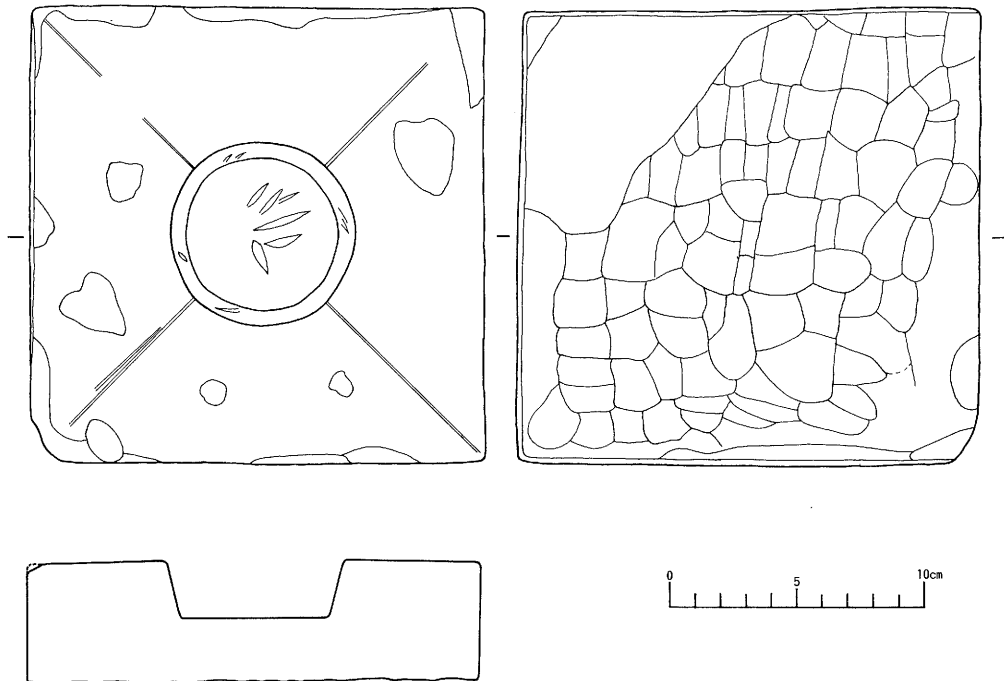
用途不明の木器と呼んだものは高さ85cmある大きな木器が二つに割れたものらしく、2個並んで出土した。外側は木の幹状に凸湾し内側は浅くくぼんでいる。内面には横に4本の溝が通っていて肋骨状をなしているが、何に使用したものか見当もつかない(図版7-e)。



第8図 石鉢



このほかにわれわれの調査の翌32年4月、水田中から発見された丸木舟がある(図版6-b)。長さ4.8m、幅約0.4m、高さ18cmである。発見の位置は池の北岸、最北の橋脚の西、2mの位置で水田面下50cmのところを底を上にして東西方向に長く埋れていたという。水田で使用する田舟としては長すぎるし、龍頭鷓首の船にはあまりにもお粗末である。普通の舟として用いられたものであろう。この丸木舟の存在は現在の水田がかつては舟を必要とするほど水量



第9図 方形石盤

の多い池であったことを物語るものである。しかし丸木舟はいつの時代にも存在し得るものであるから年代決定の決め手にはならない。

このように大御堂跡ならびに池からの出土品には確実に平泉時代まで溯るものはないとすれば大御堂の設立年代を決めることは不可能なのであろうか。ここに新たに顧られるのが、もとの地にあったといわれる花山寺の伝世遺物である。それから見ると出土遺物とは別な視野がひらけて来るのである。

5 大御堂と花山寺

『安永風土記書出』の、花山村森にあった真言宗花山寺の書出には
一最初立地移替之事

先年ハ当村大御堂ト申所ニ住居仕、狩野兵庫頭殿為猶祈願所相勤メ候由ニ御座候処、慶長年中遠藤文七郎先祖同姓式部少輔玄信代当村御知行拝領之節、右除地エ寺場引移、遠藤家御祈願所ニ相成候。最初ハ村寺ニ御座候処、安永二年四月ヨリ家中寺ニ罷成申候事。

とあって、花山寺はもと大御堂の地にあったのを、慶長年間に遠藤玄信が花山を知行地にもらった際、森へ移したものであるとしている。遠藤玄信が川口の領主になったのは『伊達世臣家譜』によれば慶長19年のことであるが、この際に移転したとすれば、大御堂跡から寛永通宝が出土することをいかように解すべきであらうか。これは花山寺は森の地に新築して移転されたもので、もとの大御堂の建物はそのままの地にあつて「朽ち捨て」になったものと解すべきであらう。発掘の際大御堂の内陣跡から建築用材と見られる角材が4本出土したこともこれを裏付ける(第6図、図版2-b)。大御堂跡から寛永通宝が出土することは慶長の移転以後にも大御堂は何等かの形で遺っていたことを示すものであろう。

森の花山寺が大御堂の花山寺の後身であるというからには、大御堂にあった寺も花山寺と呼ばれていたにちががなく、大御堂は花山寺の大御堂、すなわち阿弥陀堂であったのだ。

大御堂にあったと『風土記書出』に伝えている丈六阿弥陀如来像は今日遺っていない。『安永風土記書出』当時すでに失われていたと見えて、『書出』では花山寺の本尊は身丈1尺4寸の不動明王となっている。いまでは森の花山寺の建物も失われている。ただ森の花山寺境内にやはり大御堂の地から移したとの伝えを持つ不動堂があつて、そこに運慶の作と伝えられる木造不動明王立像、二童子像、役行者像、弘治4年の銘をもつ鰐口が遺っている。この四つが古い花山寺の伝世遺物のすべてである。

この不動明王立像ならびに二童子像は現在鎌倉時代のものとして、県の重要文化財に指定されているが、京都府峰定寺の久寿元年(1156)在銘の不動明王立像および二童子像ならびに静岡県願成就院の文治二年(1186)在銘の不動明王立像および二童子像とよく似ているので平泉

の基衡・秀衡時代の製作と見て大過あるまい。ここに花山村の創建年代を解く一つの鍵がある。役行者像と言われているものは破損がはなはだしく、年代は明らかではないが立像であるのが珍しい。

鰐口は直径28.3m、厚さ11.8cmの環耳式の鰐口で、撞座には9個の蓮子を有する複弁八葉蓮華文を置き、一番外側のいわゆる銘帯に陰刻で

奥州一迫花山郷金峯山花山寺

弘治四年戊午四月十日

と左右に書き分け、次の外区に

大旦那 藤原朝臣狩野兵庫允為猶

奉寄進 大工 早山綱次



1. 不動明王立像 二童子像

とやはり左右に書き分けてある。この藤原朝臣狩野兵庫允為猶と早山綱次の名は、いまは失われてしまった花山寺の鐘銘にも見えるところであって狩野為猶は花山村草木沢の巳ノ口館主で、天文弘治の頃におけるこの地方の支配者であり、早山綱次は鋳物師として有名な会津の早山家の一族であったと思われる。

花山寺の鐘は早くから花山寺をはなれて、仙台八幡町の龍宝寺にかけてあると『風土記書出』は伝えているが、現在の龍宝寺にはこの鐘はない。ただその銘文だけは知られている。

南瞻部州大日本国陸奥国栗原郡金田荘一迫花山郷金峯山花山寺鐘一口

常住大檀那藤原朝臣大宰之後胤狩野兵庫允為猶

本朝四国土佐侶清真上人

供物 権大僧都覚如

権律師 覚雅

中條 光信

崇天文二十四年卯十一月七日

大工当国会津住人 早山綱次

崇小工 佐藤八九十

これら鰐口銘および鐘銘によれば花山寺が天文弘治の頃に荘厳されたことは事実で、鐘銘に見える清真上人とは『花山寺書出』の「開山の事」の條に

当時ハ誰開山ト申儀并年月共相知不申候。清真法印弘治三年中興ニ付当安永七年迄貳百貳

拾貳年ニ罷成候事

とある清真法印で、花山寺の中興開山であるが、中興とある以上、花山寺がそれ以前から存在していたことは明らかである。

花山寺の歴史の古いことは他の方面からも立証することができる。いまは盗難にあって行方不明になっているが、花山村の御嶽神社にあった銅造蔵王権現立像は、鎌倉時代の優秀作といわれ、昭和3年に国宝（現在の重要文化財）に指定されたほどのものである。この蔵王権現は



2. 花山寺鑿口

大和吉野の金峯山蔵王権現からの勧請とといわれているが、その製作のすぐれているところから見ても、他からの伝来品であることは確かである。金峯山権現の信仰は藤原時代から鎌倉時代にかけてさかんであったから、この蔵王権現もその頃修験者によって輸入されたものと思われる。花山寺が御嶽神社と無関係でなかったことは、その位置も近く、また花山寺の山号が金峯山であることで明らかである。そうすると花山寺は降っても鎌倉時代に存在したことはまちがいなさろう。

鎌倉時代にも藤原時代に引続き、浄土庭園が造られたことは建久2年（1192）に頼朝が平泉の寺にならって建てた鎌倉の永福寺は別としても、文永2年（1265）建立の足利市の智光寺や文永6年（1269）建立の横浜市称名寺の例によって知ることができる。したがって花山寺の創建年代を藤原時代後半から鎌倉時代に限定することができるのであるが、鎌倉時代に建てられたとすると誰れがこのような寺院を建てたであろうか。鎌倉時代に一迫川流域に所領を持っていた武士で、名の知られているのは畠山氏と朽木氏であるが、彼等がその所領の中心からはなれた花山に自分の寺を造ったとはとうてい考えられない。花山寺の創建はもっと溯らせる方が妥当である。

『吾妻鏡』建久元年（1190）3月10日の條には、藤原泰衡の歿後、出羽で反乱をおこした大河次郎兼任が、花山、干福（仙北）、山本を經、亀山を越えて栗原寺（栗原郡栗駒町尾松）に出たことが記されている。兼任は出羽から出発しているから、この文章を文章通りに解釈する限り、ここに出て来る花山は出羽の仙北郡より北に求められるべきであるが、この文章にどれ

ほどの地理的正確さを要求し得るかは問題であって、仙北郡の北に花山という地名の見出し得ない現状から考えるならば、これは陸奥側の花山であって、本来ならば亀山を越えたあとに来るべきものであるが、鎌倉人が現地の地理不案内のために仙北、山本よりも前に書かれたものと見る方が妥当である。花山は現在でこそ鉄道から遠くはなれているために僻地と見られているが、昔は陸奥の栗原郡と出羽の雄勝郡を結ぶ交通路上にあったもので、近世に御堂の奥の温湯に花山番所が設けられていたのはその名残である。花山の名が『吾妻鏡』建久元年の條に出ているのを見れば、その名は鎌倉時代のはじめには知られていたわけで、それはどちらが因であり、果であるかわからぬが、おそらく花山寺の存在と無関係ではないであろう。花山寺の建立がその遺物不動明王像の製作年代が示すように平泉時代までさかのぼり得る可能性は十分ある。しかしどのような理由によって、また誰によって花山の地にこのような寺院が建てられたかということは現在の段階では皆目わからない。ただ御嶽神社の別当であった中條家の記録に御嶽神社に藤原基衡の所領寄進があったという社伝を記しているのは注意すべきであろう。



3. 銅造蔵王権現立像

6 花山寺の歴史的性格

『吾妻鏡』の文治5月9日23日の條には源頼朝の奥州征伐の後、平泉を案内した奥州の故老、豊前介実俊の言葉として

清衡は継父武貞卒去の後、奥六郡伊沢、和賀、江刺、稗抜、志波、岩井を伝領す。去ぬる康保年中、江刺郡豊田館より岩井郡平泉に移り宿館となし、卅年を経て卒去せり、両国陸奥出羽一万余の村あり。村毎に伽藍を建て、仏性燈油田を寄附す。基衡は果福父に⁺軼ぎ、両国を管領し、また卅三年の後、夭亡せり。秀衡父の譲を得、絶えたるを継ぎ、⁺廢れたるを興す。將軍の宣旨を蒙りて以降、官禄父祖を越え、榮輝子弟に及ぶ。また卅三年を送りて卒去す。己上三代九十九年之間、造立するところの堂塔幾千万宇なるを知らず。(原文漢文)

ということがしるさされていて、平泉の藤原氏三代の間に、陸奥、出羽両国に幾千万の寺塔が建

てられたと述べている。この幾千万というのはもちろん誇張であるにちがいないが、多くの寺院が建てられたことは事実であろう。

ところが今日平泉時代の寺院の遺跡として東北地方で知られているものは、清衡の建てた平泉の中尊寺、基衡の建てた毛越寺、基衡の妻の建てた観自在王院、秀衡の建てた無量光院、秀衡の妻の建てた宮城県角田市西根の高藏寺阿弥陀堂、基衡の娘、徳尼（岩城則道の妻）の建てたといわれる福島県いわき市白水の願成寺阿弥陀堂などがあるにすぎない。このほかにも文献によってその存在が知られる岩手県江刺市の益沢院、一関市の骨寺などがあるが、それらを合せても十指に足りぬほどで、幾千万という数にはほど遠い。それでは他の寺院はどうなったのであろうか。藤原氏の滅亡と共に寺運もおとろえて、滅亡してしまったにちがいない。

滅亡したにしても、その遺跡や遺物の中には今日まで遺っているものがあるはずである。東北各地の寺院に伝わる藤原時代の仏像の中には所伝を欠くにしても、このような寺院の遺物であろう。しかしこの時代の寺院遺跡になるときわめて少数である。

花山寺の遺跡は埋れてしまった平泉時代の寺院遺構と見るべき稀なる例と思われるが、これを確証するためには大御堂周辺および池跡のもっと規模の大きい発掘調査が望まれる。

昭和31年度にわれわれの行なった調査は、費用、日数の関係もあって最近の発掘から見れば試掘程度のもので、大御堂跡は発掘したと言うものの、寺地の東西は未調査であり、池もその大きさは正確にはきわめられていない。

最近平泉の諸寺院や白水の願成寺阿弥陀堂で行なわれているような日数をかけた大規模な発掘が行なわれるならば、他の建築遺構が発見される可能性もあり、池もまた復元も可能である。そのような緻密な発掘調査を経てはじめて花山寺跡の歴史的な性格を明確にすることができるであろう。

a
花山寺跡全景
(標柱：大御堂跡)
(水田：池の跡)



b
花山寺跡全景
(水田の白札は
中島の位置)



c
西北から見た
大御堂跡





a



b



c

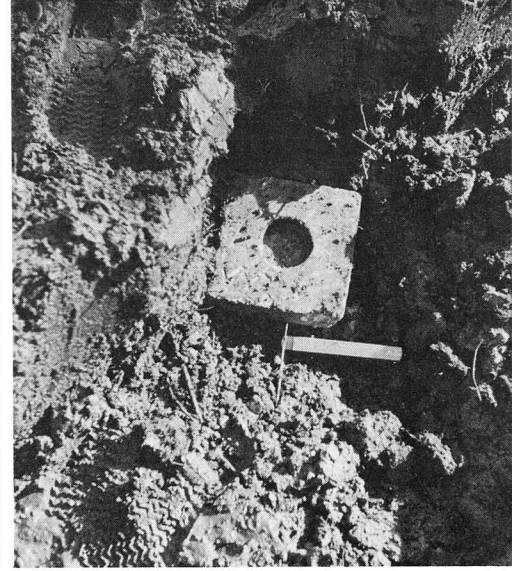
- a 東から見た大御堂跡
- b 内陣より建築材出土
- c 内陣西北隅の礎石



a



b



c



d

- a 大御堂前面の石積
- b 内陣より石鉢破片出土状態
- c 大御堂跡西側より方形石盤出土状態
- d 大御堂前面の木橋



a 大御堂東南の建物
礎石



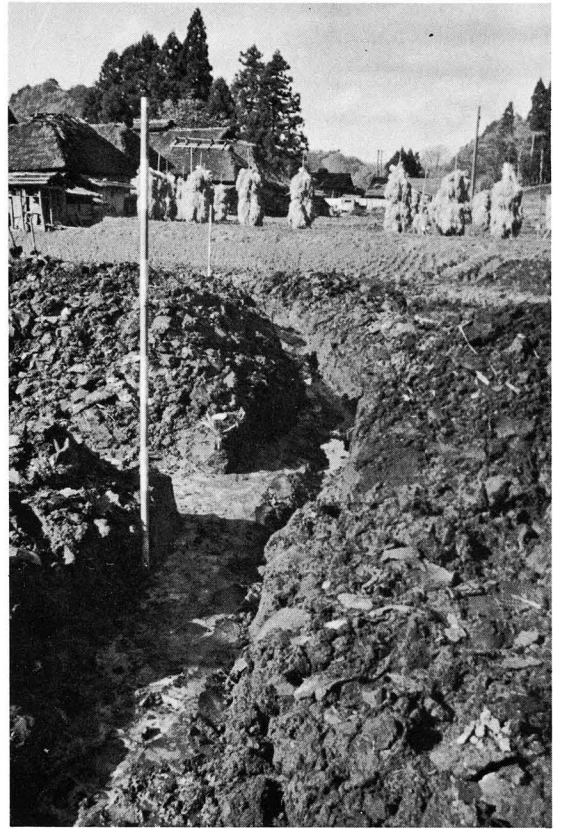
b 南から見た中島跡



c 北から見た中島跡
と橋柱



a 中島跡の南岸



b 中島跡の北岸



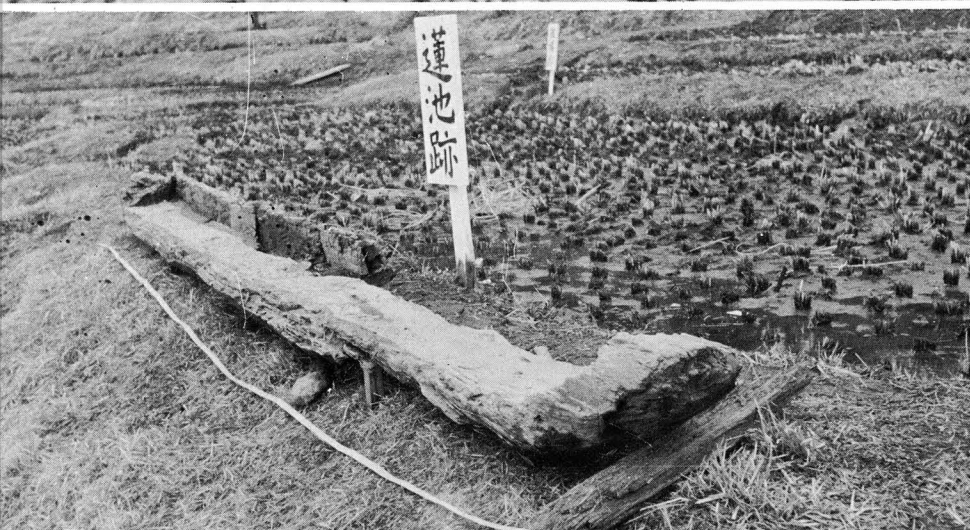
c 中島南トレンチ



d 中島南方トレンチ木椀出土状態



a 大門出土の石



b 丸木舟



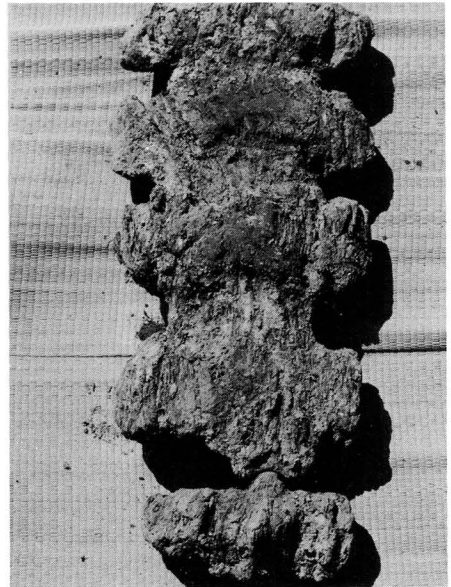
c 黒漆椀



a



b



c

a 木鉢 b 木椀 c 木製品

花山村教育委員会

教育長 狩野 政雄

事務局長 佐藤 清六

主 事 千葉 明美

宮城県教育庁文化財保護課職員（昭和53年度）

課 長	氏家 和典	調査第1係係 長	高橋 多吉	調査第2係係 長	佐々木茂禎
課長補佐	佐藤 茂	技術主査	早坂 春一	技術主査	平沢英二郎
” 兼管理第2係長	扇 正 人	技 師	小井川和夫	技 師	佐々木安彦
管理第1係 長	加藤 忠雄	”	高橋 守克	”	加藤 道男
主 事	佐藤 信子	”	丹羽 茂	”	遊佐 五郎
”	三浦 正義	”	齋藤 吉弘	”	森 貢喜
管理第2係主 査	中田 悌子	”	千葉 宗久	”	太田 昭夫
”	渡辺 正憲	”	真山 悟	”	阿部 恵
		”	阿部 博志	”	手塚 均
		”	小野寺祥一郎		
		”	小川 淳一		
		嘱 託	熊谷 幹男		

花山村文化財調査報告書第1集

花 山 寺 跡

昭和54年3月25日印刷

昭和54年3月30日発行

発 行 花山村教育委員会

栗原郡花山村字本沢久保3

印 刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町24-24 ☎631166
